

大学に来て大学を考える —大学は劣化している?—

佐藤純一 / 東京大学工学部

「鉄と鋼」の談話室に「大学は劣化している?」という題で原稿執筆の依頼を受け、大変なテーマで驚くとともに、劣化しているのは自分の方ではないかという自責の念も湧いてきた。1昨年の平成4年10月1日に高炉5社の寄付によって東京大学工学部金属工学科に開設された寄付講座「相関製鉄システム学 (BF5) 講座」の担当教授として着任してから1年4ヶ月余りが経った。昭和37年に前身の学科だった冶金学科を卒業後、その後大学院を経て製造業で工場、研究所、本社勤めをして戻ってみると、変わってないところ、変わったところそれぞれある。変わっていないのは、例えば冶金学科のあった工学部4号館と新館の位置であるが、今回の題のように「劣化しているのか?」と聞かれると、少なくとも4号館の内装は壁の塗装が剥がれ、新館は昭和30年代の安普請のせいか、どちらが旧館なのか分からない程に劣化している。しかし、研究教育の組織としては、私が学生の頃は冶金学科 (私は今でもこの方がよいと思っているのだが) で6講座であったのが、材料学科、金属工学科とそれぞれ6講座を擁する材料系学科12講座として拡大しており、講座名も「鉄冶金学」を除くと全て私がいた時と違っている。教官陣も東大の金属以外の学科や他の大学からもこられている。こういう体制になってからすでに約10年経っている。高度成長期に対応した講座の増設、素材産業自体の変貌と自動車、エレクトロニクス、情報産業等の産業の成長に対応した材料技術への多様な要請を受けて時代に柔軟に対応してきたことは素直に評価せねばならない。

しかしながら「劣化」ということを現在および将来の要請への対応能力という立場で見ると、既存のものには必ず改めるべきところがある筈である。

大学に戻ってまだいくらもたたないうちに何が分かるかという批判もあろうが、大学外の世界の感じ方、考え方が私に残っている間に、短いながら大学の教官としての生活のささやかな経験と大学問題についてのいくつかの著作なども参考にして、談話室という気軽なコーナーに甘えて思うところを記してみたい。

大学とはどういうところであるべきなのか

カール・ヤスパスの「大学の理念」をめぐって

「郷に入っては郷に従え」とは言うものの、30年近くの製造業生活から大学に入るに当たって事前に大学について自分なりに考え、勉強しようと思って手にとった書物がある。ドイツの哲学者カール・ヤスパスの「大学の理念」である。この書はナチスが連合国へ無条件降伏した1945年5月にハイデルベルグでドイツの再建と新たな発展への強烈な願いの中でまとめられたものである。

今や日本は、戦後の再建、高度成長を経て世界第2のGNP大国に成長したが、世界的には東西対立構造が崩壊し、そして日本も、既存の政治・経済システムの大変革期にある。また地球環境、人口増加、エネルギー、資源について未来からの大きな要請の下に我が国だけでなく世界全体の繁栄と幸福に貢献する技術、人材を育成するためにどうすべきか、そして大学は何をすべきか、どうあるべきかを考えるために、あの歴史的な破壊と絶望の時に大学の問題についてしたためたヤスパスの著作を思い出したのである。

その序にこうある「(ナチ支配の) 12年もの歳月が大学の道徳的破滅に拍車を加えたのである。今こそは教師も学生も、その行動について省察をせまられている瞬間である。全てが動揺しているときにこそ、我々は自分がどこに立ち、何を意味しているかを、主体的に知ろうと欲するものである」。

物質的豊かさを必死に増加させる努力の結果、道徳的に破滅とまでは言わないがその劣化が大学の内外から指摘されている時に、このヤスパスの言葉は現在でも生き生きとした問題提起力をもっている。

教育基本法に照らしてみると……

さて我が国の国民が社会的活動をする規範は、日本国憲法である。これが制定された経緯、第9条の戦争放棄条項を中心に改訂論議があるが、それはさておくとして、基本的人権尊重をベースにしたところは大方異論はないであろう。

大学に関係するところでは、まず第23条「学問の自由は、これを保障する」である。当たり前のことといえばそれま

でだが、時の権力、左・右を含めた特定の社会勢力、或いは特定の産業・企業からの中立性と自主的な精神に依った学問活動を保障されているが、逆に言うとこれは大学人に対する厳しいモラルの要求ともとれる。

産・学、官・学の協力については、かつては過度の拒否的態度が特に工学における有機的な基礎研究活動の妨げとなっていた。そして近年では、そのアレルギーの体質も殆どなくなってきたことは望ましいことであり、寄付講座が東大に出来るなど一時は考えられないことであつたらう。しかし物事は何事も中庸が肝心である。仲良くすることは良いが癒着してしまつては、互いの長所の掛け算となる創造的研究成果は期待される筈がない。恰も黒潮とオホーツク寒流がぶつかるところが、豊かな漁場になるような協力の場が、本当だろう。

さらに、我が国教育の基本的あり方を規定しているのは教育基本法である。この第52条「大学の目的」に、「大学は、学術の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とある。まさにその通りだが、この法律がつくられた頃の日本、それ以前の日本も含めて、社会的、経済的状況が大きく変わり、今や18歳人口の約30%が大学に進学する。戦前は数%だったことを考えると、もはや大学は少数のエリート教育の場ではなく、むしろ日本の足腰を強くする大衆社会における役割、特に理工学系は今日の産業界を支える多数の技術者、研究者の供給源としての役割を果たしてきた。しかしこれからの日本が技術導入、追いつき型から脱出するには、再びエリート教育が望まれる段階に来ていると思われる。

「大学はこわれている」という指摘について

さて、このたび東京大学へ来て1年有余、本誌の談話室に「大学はこわれているか?」という仮題で大学の劣化について寄稿を求められた。筆者としては東京大学工学部金属工学科という限られたところで働いてみた僅かな経験から、一気に一般化して「大学は」などということは未だ到底できるわけがないと思う。

まず「こわれている」或いは「こわれかけている」と思うもの、その第1は誰の目にも明らかに建屋をはじめとする施設である。特にひどいのは、昭和30年代に工学部拡張時代に作った建屋で、例えば私が冶金学科4年時代「新館」とよばれていた建屋は、関東大震災直後に建てられた旧館に比べて我々が入れたらいいなと思つていたところだ

が、先述の通りであり、他学科の同時期の建屋の劣化も私が見たところ同様である。

そして、特に目につくのは実験室の中の自由空間のなさ、要は狭さである。空間が狭いということは、単に安全の面だけでなく、人間が時空の自由な拡がりの中で創造的思考をするための最大の精神的障害になろう。端的に言えば、今の床面積を3~4倍にすれば、大学の設備、安全問題のそして独創性も解決されよう。

一方、実験設備については、最近では研究室によってはひどいとは言えないところもあるようだが、特に産業界から来てみて、理解に苦しむのは、メンテナンス、償却という概念が殆どなく、いいのは最初だけで、研究施設装置が陳腐化の早い時代に対応していけるかどうか大変心配である。

以上はハードの面で、いずれ放置していけば「こわれる」ものの例として掲げた。ところでソフト面ではどうであろうか。私達が学生だった頃の学科名から大きく変わったところは、中でのグルーピングの横割り制をとっているところが増えている。これは単に教養学部から学生が来ないことへの対応と言うだけでなく、世の中の新しいニーズに対応した研究、教育体制をとろうとしている内部的努力の表われだともいえる。これは学科内でスクラップ・アンド・ビルドの自律作用がおきているとも言えるもので歓迎すべきことである。しかしこれが学科内だけでよいのだろうか、さらには理学部、工学部のバランス或いは区分することそれ自体どうなのか。今、当大学のみでなく各大学で真剣に検討されているようだが、問題はこういったシステムの変容、改革のための資金、人材面でのバックアップがなければ、折角の意欲的対策も「絵にかいたもち」になりはしないか。

最後に、大学人のあり方の問題であるが、人事の固定性、密室性がいろいろ批判されていて、理由のあるところもあるが、中には利潤の追求と効率を至上命令とする企業のものさしではかった意見もあるようである。まだ来て間もない筆者から見ると、人事の余りの固定性、密室性はいけませんが、持続性という面から見ると個別現象を一般化し、学問的に深め、そこから新たな発想を生み出すというビヘイビアは、比較的短期的な景気の変動を最優先せざるを得ないような世界のカルチャーにいる人間では本質的に出来ないと思う。「餅は餅屋」の一点張りはいけない。「角を矯めて牛を殺す」愚をしてはならない。大学人のあり方については短兵急に対策をとるのではなく哲学的、倫理的に本当に深いところから出たものでないと、それこそ「大学をこわし」かねないのではないか。

(平成6年3月8日受付)